

## 七病舎五号室

昭和二十六年二月十七日。

この日も、倉敷中央病院七病舎五号室へ母を見舞うために、学校帰りに立ち寄っていた。「もう、帰らないと暗くなるから」と、虚ろな目をして私に言う母の声はか細くて、震えていた。当時まだ十三歳だった私は、母のいないわが家に帰りたくなくて、母の青白く痩せた手を自分の頬に当てながら、「あと、五分だけこうして居てもいい」私は母の耳元で小声で甘えた。母は、目を閉じ、自分の頭を重そうに微かに横に振った。その時、母の落ち込んだ目じりから溜め涙であろうか、堰を切ったように流れ出て頬を濡らした。あの時、何かを予感したような母の悲愴な面持ちは、五十年余りの歳月を重ねた今でも忘れていない。

私はこれ以上母に悲しい思いをさせたくなくて、わざと明るく手を振りながら、「じゃあまた明日の朝来るね」。そう言って、いつものように一度ドアの外に出て、再びドアを開けてバイバイしようとしたら、ドアに背を向けて寝ている母は、いつもなら片手だけを振ってくれていたのに、この日は付き添っている姉に手伝ってもらいながら、手鏡でドアの所にいる私を映して見ている。その様子がよく分かったので、私は、慌てておどけた顔をしたり、泣き顔をしたり、笑って見せ

たりして、その場をつくろった。姉は母が疲れると思ったのか、私に「もう帰りなさい」というように、目で合図をしたので、仕方なく最後に手を振ってドアを閉めた。

その日は何故か病院から帰りたくなくて、院内にある温室に入り、ベンチに腰掛け、植物の間からさしこむ斜光をぼんやりと眺めながら、日々衰弱していく母のことを思っていた。



父は昭和二十年一月に出征して、その年の四月に戦死した。

母は父の戦死の公報を聞いたとき、私たち四人の姉弟。十一歳の姉、七歳の私、四歳の弟、二歳の妹を、みんな自分の脇の下へ抱え込み、流れる涙を拭おうともせず、「頑張ろうね」と、ひとこと。それ以上は何を言っても分からない幼い私たちであったから、あの一言も母が自分に言い聞かせた一言であったのだろう。

母は、父の残した六反余りの田畑を耕作し、夜には近所の人のセーターを編んだり仕立物をしたりして現金収入を得ていた。朝目覚めると母の姿はなく、お膳の上には四人分の朝食の用意がしてあり、そのひとり一人のお皿の下には必ずメモが添えてあった。

「忘れ物はないですか。新しいブルマーは買ってあげられないけれど、父さんの着物をほどいて、昨

夜仕立てておいたよ」。こんなとき、母は魔法の手を持っているかと思えるくらいうれしかった。

当時、田畑で働く母は、軍隊から払い下げられた男物の服を着て、代掻きしろかきをするために牛を使っていた。牛を動かす網捌なまはきや、水田に水を引くための発動機にエンジンをかける姿などは、母というより父の姿を思わせた。

終戦後はこの家庭でも男手が不足していたので、母は男の人のするどんな仕事でも自分でやりこなしていた。そんな忙しい母でも、私たちの登校の時間には必ず田の畦を小走りが出てきて、手拭の下から日焼けした顔を覗かせ、「気をつけて行くんよ」と、私たちひとり一人に顔をくっ付けるようにして優しい目で送ってくれた。こんなひと時がどれほど親子の絆を深めてくれたか、父のいない寂しさなどは感じなかった。

母は、自分の家族ばかりでなく、周りにも気を配る人であった。近所で人手が足りない家には作業の手伝いに行ったり、お風呂の無い家の人には、「うちに来て、風呂に入って」と、いつも気軽に声をかけてあげていた。

そんな世話好きで元気だった母が、昭和二十五年の秋頃より元気が無くなり、顔色が悪く、食欲もなくなってきた。私たちも心配な毎日を過ごすようになった。母は近くの医院に掛かっていて、私たちには心配させないように、

「疲れが溜まっていてるようだけど、直ぐに良くなるからね」と優しく言っていた。今まで風邪ひとつ

引かなかった母だったから、私はこの言葉を信じていた。だが、秋分の日の夜、私は、バタツという物音が目覚めた。座敷からトイレに行くドアが開いている。とっさにトイレの方に出てみると、母が寝巻き姿でトイレの前で倒れていた。姉も素早く駆け寄ってきた。

「お母さんー。お母さん」と、泣き声で呼びながら、姉と二人で座敷まで引きずって来て、やっと布団に寝かせたが、母の意識はなく、顔面蒼白で息遣いは荒かった。

「本家に知らせて、お医者を呼んで」

姉は叫ぶように私に言った。私は小雨の降る暗やみを必死で自転車のペダルを踏みながら、「神様、どうか母さんを助けてください。神様、神様」と、何回も同じことを繰り返して祈った。

私が本家から折り返しわが家にもどって間もなく、叔父は医者連れて家に駆けつけてくれた。診察の結果、母は夜明けを待って入院することに決まった。

倉敷中央病院七病舎五号室への面会がこの日から始まった。診察の結果、母の体内には十二指腸虫が寄生していて、そのために貧血が激しく、直ぐに輸血をしなくてははいけないと先生から言われた。祖父は、親戚はもとより町内の人たちや、自分の職場関係の人たちに協力して頂くように、毎日お願いに歩いて回った。

数日して、戦争遺児の救済として私たち家族のことが新聞の記事になると、市内はもとより、市外からも多くの人々が献血に駆けつけてくださった。中にはわざわざ病室まで訪ねてくださり、見ず

らずの人が姉や私に、

「娘さんですか、私も父を戦争で亡くしました。お母さんのことを気をつけてあげて下さい。きっと良くなりますよ」。諭すように励ますように優しく声を掛けてくださることもあった。十三歳の私はどのように感謝の気持ちをお伝えしたらいいのか言葉が分からなくて、ただ泣きながら「ありがとうございます」が、皆さんへの、精一杯の言葉であった。

各地から見舞いの手紙やはがきを頂き、姉は、毎日それを母に読んで聞かせてあげていた。母は、「ありがたいことです。何が何でも良くなって、皆さんにご恩返しをしなくては」と、言っでは、食欲のない中でもスプーン一杯の重湯を口に入れていた。

祖父は母の入院以来、毎日欠かさずにご先祖様に般若心経を五十巻唱えていた。このお祈りなら私にもできる。母のために何かをしてあげたい、翌日から祖父と一緒に心経を唱えて、懸命に母の病氣快復の祈願をした。

当時、内科医長の遠藤先生は、緑葉食青汁運動を提唱実践しておられた。青汁はそのころ市販のものではなく、毎朝祖母が作った青汁を、私が登校前に母のところへ届けることが日課となって、朝晩病院に行けることが楽しみであった。

母は、初めの頃は持つていくと直ぐに「これを飲むと元気になれるから」と、飲んでくれていたが、日ごとに体力の衰えが目立ちだし「後で飲むからね」と、私にすまなさそうに告げる日もあった。

この頃から母は、輸血をすると拒絶反応が出て、ベッドの位置が変わるかと思えるほどの震えがきて、苦しそうでとても傍で見えいらなかった。そんな時、姉は私を外へ連れ出した。私は心配で帰るに帰れず、五号室が見える階段のところまで心経を唱えて、早く良くなりますようにと、一生懸命に神仏に祈願した。



温室の中の人影も少なくなり、帰りを待っていてくれる祖母の顔が思い出されて、いつもより遅く家についた。いつものように祖父とお祈りをすませ床に就いたが、夕方の母の顔が目には浮かび寝付かれなかった。

その時、誰かが知らせにきた音がした。瞬間祖母の叫び声が聞こえた。「みんな直ぐ、病院へ行くよ」私には、そのわけを聞く勇気が出なかった。

二月十七日。七病舎五号室へ三度目に入った時には、主治医の先生が母の手を離されたときであった。私は母に縋り、

「私も連れて行って、連れて行って」と叫びながら泣いた。この世に神様も仏様もないの。二度と上がれない深い海底に投げ捨てられた思いであった。私は姉の手を取り、妹の肩を抱いて、「お母さん、

お母さん」といつまでも泣き続けていた。



今思うと、一番辛かったのは、四人の幼な子を残し、三十七歳で黄泉の客となった、母その人ではなかったか。その母は七十歳になった私の心の中に、いつまでもいつまでも生き続けている。

平成十七年度 倉敷市民文学賞 大賞受賞

## 足跡

ある日の夕方帰宅すると、庭に降り敷く雪に足跡があった。

飛び石の上を渡って歩くには、歩幅が足りないのか、小さな長靴の跡は、飛び石の横に左右のバラ

ンス良く脇目も振らず、真っ直ぐに並んでいた。

妹、和子の足跡であることが、直ぐに分かった。この吹雪の中を、小さな体を丸めて歩く妹の姿を想像しながら足跡を追ってみた。足跡は、郵便受けまで続いていて、よく見るとこんもりと盛り上がった飛び石に躓いたのか、長く伸びた足跡が一カ所あった。転んで怪我などしていなければいいがと、急に不安の思いが胸で渦を巻く。

郵便受けの中を見ると、梅の花を模したカステラが一つ、何枚ものちり紙に包んで入れてあった。

私が六年生のとき、悲しい別れが二度もあった。母との死別、妹との別れである。

昭和二十五年母が倒れて入院して三ヶ月目の夜半、親戚の叔母が激しく雨戸を叩き私たちに知らせにきてくれた。「お母さんの容態が悪いの、すぐに病院へ行こう」言いながら、寝ている和子を背負い、病院へ向かう叔母の後を追った。

和子は眠そうな目を擦りながらも、「おかあちゃん」と、嬉しそうな声を出している。無理もない母が入院以来、毎日母を恋しがり、寝言を言っては飛び起きたりしていた。妹は、母のところへ連れて行ってもらえることを喜んでいる。こんな妹の声を聞くと、自分の悲しさだけでなく、妹への不憫さも加わって熱い涙が頬を伝う。この涙さえも無情な二月の寒風が冷たく凍らせた。

病院に着いたときには、母はすでに黄泉の客となっていた。そんな母を眠っていると思ったのか妹

は叔母に抱かれた体をねじるようにて、母の頬を触り、

「おかあちゃん、おかあちゃん」と叫んでいた。この様子を見て自分の悲しさよりも妹への愛おしさに息の詰まる思いであった。

母はそのとき三十七歳、父はすでに戦死して亡く、十七歳の姉を頭に、私と九歳の弟、五歳の妹が残された。

不憫に思った父のいとこに当たる親戚が、「妹を養女として育てたい」と、こう言ってくれた。しかし、私たち姉弟には決して嬉しいことではなかった。

母を亡くし、そのうえ、妹と別れることは身を裂かれる思いであったが、祖父が、

「みんなのために、一番いいことだから言ってくれているんだよ、同じ町内だし、家の本家だからいつでも和子には会える」。

祖父に諭されると幼い私たちは、何も言えなかった。

数日して親戚の叔母さんが妹を迎えに来た。妹は、親戚の家に行かないとは言わなかったが、親戚にお世話になる訳は、なぜなのかわからず、「お姉ちゃんも、お兄ちゃんも一緒にいこうよ」と、叫んだ。でも、一緒に来てくれない姉兄への腹いせを、ゴム草履を履いた足にこめ、地団太を踏みながら、叔母さんに手を引かれ、足跡を残して家族と別れた。

妹は、五人姉妹のいる親戚の家へ六番目の子どもとして加えてもらったのである。

妹の養父母はもとより、歳の離れた義姉さんたちも妹を、寂しがらせないように気を遣ってやって来ていた。義姉さんに手を引かれて、何処へでも連れて行ってもらって、可愛がられている妹を見ると、「これでよかったんだ」と、思う半面でどこか手の届かない所へ、妹を私の体から吸い取られるようで、複雑な思いであった。

学校帰りに、部活のない日は遠回りして妹の家の前を通る。夕方の早い時間だと、外で遊んでいることがある。私は友達と遊んでいる妹の後ろ姿をちらつと見ると、なぜか安心できた。

ところが、妹の方が先に私に気付いて、走り寄って来ることがある。「お姉ちゃん」と、言っ、ひざまずいている私の両手をしっかりと握りしめ、そして確かめるように妹は、

「誰もおうちにいないから、おやつを手紙入れに置いて帰るの、みんな食べている？」。如何にも、気にかけているように、私を見上げて聞く。

「ありがとう、食べているわ、でも持ってこなくてもいいから、和ちゃんが食べたら」と諭すように、妹の顔を見ると、妹が心配そうに覗き込んで私の顔をじっと見て、

「お姉ちゃんや、お兄ちゃんには、父さんや母さんが居ないもん」。幼い妹の気遣いに、返すことばさえなく、「もう、遅くなるからおうちへ帰りなさい」。こう私が言うと、妹は小さな唇を巻き込み口は固く閉じて、差し含むのを必死で堪えて、こくと、頷いて手を振りながら帰っていった。

妹を送って、堪えに堪えていたものが、堰を切って頬を伝った。

家でも姉弟三人で妹、和子の話が出なかった日は一日もなく、郵便受けに入っていたものを見ては、食べることより、妹の幼心がいじらしくて、涙することが多かった。

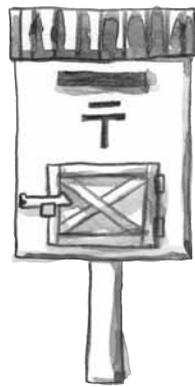
年月は悲しいことも少しずつ忘れさせてくれ、妹も高校を卒業して、就職し、姉も私も嫁いで家を出た。

妹の縁談も決まり、小雪がちらつく節分の日に、花嫁姿の妹は養父母に付き添われて、実家の両親の仏壇に挨拶に来た。弟はこの日、妹 和子に、

「和子、郵便受けにいろんな差し入れを置いてくれてありがとう。今日は郵便受けから兄ちゃんの気持ちばかりの餞はなむけを持って行ってくれ」。弟のことばに、みんな笑いながら涙を拭いた。

庭にいつの間にか積った薄雪の上に、幸せに向かつて歩く妹の足跡が残っていた。

平成二十七年 文芸思潮エッセイ賞 優秀賞受賞



## 五右衛門風呂が育む絆

戦後は、お風呂のない家庭が多かった。

夕方になると近所の人たちが家族連れで「お風呂をしんぱんご相伴になります」こう言っただけで来た。すると祖父は小学生の私に、

「女の子は誰が風呂に入っているの、『お湯加減はどうですか』と、聞くものだよ」。

このように教えられているので、一人ひとりに声をかけた。湯船の中の人と、風呂の焚口に座っている私は、いろんな話が出来た。昔話をしてくれるおばあちゃん、旅行の話を聞かせてくれるお姉ちゃん、おだんご作りや手打ちうどんの打ち方を教えてくれるおばさん。この人たちはみんな実際に作った料理を持参してくれたり、旅のお土産を貰ったり、隣のおばあちゃんは、冬の風呂焚きは寒かろうと、セーターや半纏はんてんまで作って届けてくれた。風邪など引いてお風呂に来れないと聞けば、熱いおうどんや、雑炊などを作って見舞った。家族同然のお付き合いである。このような絆があればこそ食糧難のあのころ、また父を、夫を、息子を戦争にとられ男手不足の農村を支えてこられた。

昭和三十年前半、私が嫁いだ先も五右衛門風呂であった。勤めをしていた私に代わって、風呂焚きは義母の受け取りのように、毎日沸かしてくれていた。日曜日など私が風呂炊きをする時義母はきまっ